

3. いも・根菜類

(3010) さつまいも

本作物は、香取地域を中心に印旛・君津地域でマルチ栽培等が行われており、ほとんどが火山灰土において作付けされている。これら栽培地域では、たい肥等有機質資材の投入や緑肥作物の作付・すき込み等により地力を増進していくことが必要である。

施肥については、肥効調節型肥料の活用や、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、ハスモンヨトウ、ナガジロシタバ、イモキバガ等に加え、コガネムシ類の被害も多いことから、フェロモン剤の活用、マルチ栽培や機械除草により化学合成農薬の節減を図っていくことが必要である。また、連作等によりネコブセンチュウによる被害も考えられることから、対抗植物を作付けし、土壌消毒剤の使用量を減少させることも必要である。

なお、茎葉かんしょについては、本指針で読み替えるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に、定植1か月以上前に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。 2 緑肥作物利用技術 前年の夏にギニアグラス等を栽培してすき込む。
化学肥料低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 肥効調節型肥料施用技術 地力・土性等に応じて適正な肥効調節型肥料の種類を選択し、植付前に施用する。 2 有機質肥料施用技術 油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。品種・前作物の種類等により窒素施用量を調節する。
化学合成農薬低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 温湯種子消毒技術 種いもや苗を温湯に浸漬する。種いも場合は 47℃～48℃の温湯に 40 分、苗の場合は 15 分浸漬し、黒班病、黒あざ病、つる割病等を防除する。 2 機械除草技術(どちらか1つでも可) ①管理機等を用いて、雑草発生初期に中耕する。 ②刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の除草を徹底する。 3 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。 4 対抗植物利用技術 前作物に対抗植物を栽培することにより線虫密度を低下させる。 5 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。 6 フェロモン剤利用技術(どちらか1つでも可) ①交信かく乱剤を農薬取締法で定められた使用方法に従って使用し、広範囲に害虫を防除する。 ②雄成虫誘引剤により発生消長を把握し、効果的な防除を行う。 7 マルチ栽培技術 黒色または着色フィルム等の利用により雑草を防除する。
その他留意事項	

(3020) ばれいしょ

本作物は、印旛、香取地域を中心にマルチ栽培等が行われており、ほとんどが火山灰土において作付けされている。

これらの地域では、たい肥等有機質資材の投入等により地力を増進していくことが必要である。

施肥については、局所施肥を進めると同時に、肥効調節型肥料の活用や、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、機械除草及びマルチ栽培により除草剤の使用を削減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<p>1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥などを施用する。 オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。</p>
化学肥料低減技術	<p>1 局所施肥技術 作物の根が吸収しやすい位置に肥料を集中的に入れることで、施肥量を削減する。</p> <p>2 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正な肥効調節型肥料の種類を選択し、施用する。</p> <p>3 有機質肥料施用技術(どちらか1つでも可) ①油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。 ②牛ふん、豚ふん、鶏ふん等の家畜ふん由来たい肥を化学肥料に代替して施用する。 なお、施用に当たっては「主要農作物等施肥基準」に従い、基肥として用いる化学肥料の概ね3割程度を目安に代替する。</p>
化学合成農薬低減技術	<p>1 機械除草技術(どちらか1つでも可) ①管理機等を用いて、雑草発生初期に中耕する。 ②刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の除草を徹底する。</p> <p>2 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>3 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>4 フェロモン剤利用技術(どちらか1つでも可) ①交信かく乱剤を農薬取締法で定められた使用方法に従って使用し、広範囲に害虫を防除する。 ②雄成虫誘引剤により発生消長を把握し、効果的な防除を行う。</p> <p>5 マルチ栽培技術 黒色または着色フィルム等の利用により雑草を防除する。</p>
その他留意事項	

(3030) だいこん

本作物は海匠地域を中心に、印旛・山武地域等の平坦な火山灰土で県内に広く栽培されており、作型はほとんど秋冬・春だいこんである。

これら栽培地域では、たい肥等有機質資材の投入や緑肥作物の作付・すき込み等により地力を増進していくことが必要である。

また、本作物は比較的施肥量が少ないものの、局所施肥、肥効調節型肥料の活用や、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、コナガ、アブラムシ、キスジノミハムシによる食害やネグサレセンチュウが問題となっていることから、対抗植物の利用による耕種的防除を中心に、被覆資材の利用、マルチ栽培、生物農薬やフェロモン剤の使用、機械除草の導入により化学合成農薬の節減を図っていくことが必要である。

なお、二十日だいこん、中国野菜の紅心だいこん、青長だいこん等については、本指針で読み替えるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<p>1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に、播種1か月以上前に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。</p> <p>2 緑肥作物利用技術 野生種エンバク、ギニアグラスをだいこんの栽培時期に合わせて使い分ける。すき込み後1か月以上の十分な腐熟期間をおいて播種する。</p>
化学肥料低減技術	<p>1 局所施肥技術 作物の根が吸収しやすい位置に肥料を集中的に入れることで、施肥量を削減する。</p> <p>2 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正な肥効調節型肥料の種類を選択し、施用する。</p> <p>3 有機質肥料施用技術(どちらか1つでも可) ①油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。 ②牛ふん、豚ふん、鶏ふん等の家畜ふん由来たい肥を化学肥料に代替して施用する。 なお、施用に当たっては「主要農作物等施肥基準」に従い、基肥として用いる化学肥料の概ね3割程度を目安に代替する。</p>
化学合成農薬低減技術	<p>1 機械除草技術(どちらか1つでも可) ①管理機等を用いて、雑草発生初期に中耕する。 ②刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の除草を徹底する。</p> <p>2 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>3 対抗植物利用技術 前作物に対抗植物等を栽培することにより線虫密度を低下させる。</p> <p>4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 抵抗性品種等の利用により病害の発生を抑制する。</p> <p>5 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>6 光利用技術 反射フィルムの利用によりアブラムシの飛来を防止する。</p> <p>7 被覆栽培技術 防虫ネットを被覆して、害虫の侵入を防ぐ。</p> <p>8 フェロモン剤利用技術(どちらか1つでも可) ①交信かく乱剤を農薬取締法で定められた使用方法に従って使用し、広範囲に害虫を防除する。 ②雄成虫誘引剤により発生消長を把握し、効果的な防除を行う。</p> <p>9 マルチ栽培技術 黒色または着色フィルム等の利用により雑草を防除する。</p>
その他留意事項	

(3040) こかぶ

本作物は、主に東葛飾及び香取地域の火山灰土で、冬どり栽培を中心に様々な作型で作付けされている。これら栽培地域では、たい肥等有機質資材の投入や緑肥作物の作付・すき込み等により地力を増進していく必要がある。

施肥については、肥効調節型肥料の活用や、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、コナガ、アブラムシ、キスジノミハムシ、ハスモンヨトウの発生が問題となっている他、春夏どり栽培において萎黄病の被害が問題となっていることから、生物農薬やフェロモン剤の使用、マルチ栽培、機械除草、被覆資材の活用により化学合成農薬の節減を図っていくことが必要である。また、連作等によりネグサレセンチュウによる被害も考えられることから、対抗植物の活用により土壌消毒剤の節減を図ることも必要である。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<p>1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に、播種1か月以上前を目安に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。</p> <p>2 緑肥作物利用技術 野生種エンバク、ギニアグラス等をかぶの栽培時期に合わせて使い分ける。すき込み後1か月以上の十分な腐熟期間をおいて播種する。</p>
化学肥料低減技術	<p>1 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正な肥効調節型肥料の種類を選択し、施用する。</p> <p>2 有機質肥料施用技術(どちらか1つでも可) ①油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。 ②牛ふん、豚ふん、鶏ふん等の家畜ふん由来たい肥を化学肥料に代替して施用する。 なお、施用に当たっては「主要農作物等施肥基準」に従い、基肥として用いる化学肥料の概ね3割程度を目安に代替する。</p>
化学合成農薬低減技術	<p>1 機械除草技術(どちらか1つでも可) ①管理機等を用いて、雑草発生初期に中耕する。 ②刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の除草を徹底する。</p> <p>2 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>3 対抗植物利用技術 前作物に対抗植物等を栽培することにより線虫密度を低下させる。</p> <p>4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 抵抗性品種等の利用により病害の発生を抑制する。</p> <p>5 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>6 土壌還元消毒技術 米糠等を土壌混和し十分な水分を加え、土壌中を還元状態にすることで病害虫を防除する。</p> <p>7 熱利用土壌消毒技術 施設栽培においては太陽熱や熱水により土壌病害虫を防除する。</p> <p>8 光利用技術 反射フィルムの利用によりアブラムシの飛来を防止する。</p> <p>9 被覆栽培技術 防虫ネットを被覆して、害虫の侵入を防ぐ。</p> <p>10 フェロモン剤利用技術(どちらか1つでも可) ①交信かく乱剤を農薬取締法で定められた使用方法に従って使用し、広範囲に害虫を防除する。 ②雄成虫誘引剤により発生消長を把握し、効果的な防除を行う。</p> <p>11 マルチ栽培技術 黒色または着色マルチフィルム等の利用により雑草を防除する。</p>
その他留意事項	<p>・土壌還元消毒技術は、開始直後の曇天や地温が低い場合、土壌に十分な水分がない場合には効果が不安定となるため、初めて実施する場合には普及指導員の指導を受けることが望ましい。</p>

(3050) にんじん

本作物は、千葉・東葛飾・香取地域における春夏にんじん、印旛・香取・山武・千葉地域における冬にんじんを中心に、ほとんどが火山灰土において栽培されている。

これら栽培地域では、たい肥等有機質資材の投入や緑肥作物の作付・すき込み等により地力を増進していくことが必要である。

施肥については、局所施肥、肥効調節型肥料の活用や、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、ハスモンヨトウ等の食害に加え、ネグサレセンチュウの被害も多いことから、対抗植物の利用による耕種的防除を中心に、フェロモン剤の活用、マルチ栽培、機械除草により化学合成農薬の節減を図っていくことが必要である。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<p>1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に、播種1か月以上前に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。</p> <p>2 緑肥作物利用技術 ギニアグラス、野生種エンバクをにんじんの栽培時期に合わせて使い分ける。すき込み後1か月以上の十分な腐熟期間をおいて播種する。</p>
化学肥料低減技術	<p>1 局所施肥技術 作物の根が吸収しやすい位置に肥料を集中的に入れることで、施肥量を削減する。</p> <p>2 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正に肥効調節型肥料の種類を選択し、施用する。初期の肥効等を勘案し速効性肥料と組み合わせる。</p> <p>3 有機質肥料施用技術(どちらか1つでも可) ①油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。 ②牛ふん、豚ふん、鶏ふん等の家畜ふん由来たい肥を化学肥料に代替して施用する。 なお、施用に当たっては「主要農作物等施肥基準」に従い、基肥として用いる化学肥料の概ね3割程度を目安に代替する。</p>
化学合成農薬低減技術	<p>1 機械除草技術(どちらか1つでも可) ①管理機等を用いて、雑草発生初期に中耕する。 ②刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の除草を徹底する。</p> <p>2 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>3 対抗植物利用技術 前作物に対抗植物等を栽培することにより線虫密度を低下させる。</p> <p>4 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>5 フェロモン剤利用技術 雄成虫誘引剤により発生消長を把握し、効果的な防除を行う。</p> <p>6 マルチ栽培技術 黒色または着色フィルム等の利用により雑草を防除する。</p>
その他留意事項	

(3060) ごぼう

本作物は、印旛、香取地域を中心に春播栽培及び秋播栽培が行われており、ほとんどが北総大地の火山灰土において作付けされている。

これらの地域では、たい肥等有機質資材の投入や緑肥作物の作付・すき込み等により地力を増進していくことが必要である。

施肥については、局所施肥、肥効調節型肥料の活用や、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替していくことにより、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、3年以上の輪作などの耕種的防除や、マルチ栽培による雑草防除、対抗植物の利用により化学合成農薬の節減を図っていく必要がある。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥等を施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。 2 緑肥作物利用技術 野生種エンバク、ギニアグラス等をゴボウの栽培時期に合わせて使い分ける。すき込み後1か月以上の十分な腐熟期間をおいて播種する。
化学肥料低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術 施肥シーダー専用肥料を用いて、施肥シーダーで播種と同時に種子下に条施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正な肥効調節型肥料の種類を選択し、施用する。 3 有機質肥料施用技術(どちらか1つでも可) <ol style="list-style-type: none"> ①油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。 ②牛ふん、豚ふん、鶏ふん等の家畜ふん由来たい肥を化学肥料に代替して施用する。 なお、施用に当たっては「主要農作物等施肥基準」に従い、基肥として用いる化学肥料の概ね3割程度を目安に代替する。
化学合成農薬低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。 2 対抗植物利用技術 前作物に対抗植物等を栽培することにより線虫密度を低下させる。 3 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。 4 光利用技術 反射フィルム等の利用によりアブラムシの飛来を防止する。 5 マルチ栽培技術 黒色または着色フィルム等の利用により雑草を防除する。
その他留意事項	<p>・反射フィルム・テープ等は、アブラムシが飛来・増殖する6月または秋口に十分な量を、出来るだけ植物体の近くに設置する。</p>

(3070) れんこん

本作物は、長生地域を中心に栽培が行われており、第三系粘質土において作付けされている。

これらの地域では、たい肥等有機質資材の投入等により地力を増進していくことが必要である。

施肥については、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、腐敗病、褐斑病、アブラムシ類の被害が多いことから、健全な種れんこんの選別、こまめな被害部の除去、連作をさけるなどの耕種的防除のほか、機械除草により、化学合成農薬の削減を進めることが必要である。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥等を施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。
化学肥料低減技術	1 有機質肥料施用技術(どちらか1つでも可) ①油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。 ②牛ふん、豚ふん、鶏ふん等の家畜ふん由来たい肥を化学肥料に代替して施用する。 なお、施用に当たっては「主要農作物等施肥基準」に従い、基肥として用いる化学肥料の概ね3割程度を目安に代替する。
化学合成農薬低減技術	1 機械除草技術(どちらか1つでも可) ①管理機等を用いて、雑草発生初期に中耕する。 ②刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の除草を徹底する。 2 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。 3 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。
その他留意事項	

(3080) さといも

本作物は、印旛・山武・香取地域を中心に作付けされており、ほとんどが火山灰土において栽培されている。

これら栽培地域では、たい肥等有機質資材の投入や緑肥作物の作付・すき込み等により地力を増進していくことが必要である。

施肥については、肥効調節型肥料の活用や、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、ハスモンヨトウ等の被害に加え、ネグサレセンチュウの被害も多いことから、対抗植物の利用による耕種的防除を中心に、フェロモン剤の活用、マルチ栽培、機械除草により化学合成農薬の節減を図っていくことが必要である。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<p>1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。</p> <p>2 緑肥作物利用技術 野生種エンバクを栽培してすき込む。すき込み後1か月以上の十分な腐熟期間をおいて定植する。</p>
化学肥料低減技術	<p>1 肥効調節型肥料施用技術 作型・土性等に応じて適正な肥効調節型肥料の種類を選択し、施用する。</p> <p>2 有機質肥料施用技術(どちらか1つでも可) ①油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。 ②牛ふん、豚ふん、鶏ふん等の家畜ふん由来たい肥を化学肥料に代替して施用する。 なお、施用に当たっては「主要農作物等施肥基準」に従い、基肥として用いる化学肥料の概ね3割程度を目安に代替する。</p>
化学合成農薬低減技術	<p>1 機械除草技術(どちらか1つでも可) ①管理機等を用いて、雑草発生初期に中耕する。 ②刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の除草を徹底する。</p> <p>2 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>3 対抗植物利用技術 前作物に対抗植物等を栽培することにより線虫密度を低下させる。</p> <p>4 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>5 フェロモン剤利用技術 雄成虫誘引剤により発生消長を把握し、効果的な防除を行う。</p> <p>6 マルチ栽培技術 黒色または着色フィルム等の利用により雑草を防除する。土寄せ時に除去する。</p>
その他留意事項	

(3090) やまのいも

本作物は、印旛・香取・海匝地域を中心に露地栽培が行われており、ほとんどが火山灰土において作付けされている。

これら栽培地域では、たい肥等有機質資材の投入や緑肥作物の作付・すき込み等により地力を増進していくことが必要である。

施肥については、肥効調節型肥料の活用や、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、ネコブセンチュウの被害が多いことから、対抗植物の利用による耕種的防除を中心に、マルチ栽培、機械除草により化学合成農薬の節減を図っていくことが必要である。

なお、やまといも、じねんじょ、ながいも等については、本指針で読み替えるものとする。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	<p>1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥を基本に施用する。オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。</p> <p>2 緑肥作物利用技術 前年の夏に、ギニアグラスを栽培してすき込む。</p>
化学肥料低減技術	<p>1 肥効調節型肥料施用技術 肥効調節型肥料を施用する。</p> <p>2 有機質肥料施用技術(どちらか1つでも可) ①油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。 ②牛ふん、豚ふん、鶏ふん等の家畜ふん由来たい肥を化学肥料に代替して施用する。 なお、施用に当たっては「主要農作物等施肥基準」に従い、基肥として用いる化学肥料の概ね3割程度を目安に代替する。</p>
化学合成農薬低減技術	<p>1 機械除草技術(どちらか1つでも可) ①管理機等を用いて、雑草発生初期に中耕する。 ②刈払い機等を用いて、ほ場及び周辺の除草を徹底する。</p> <p>2 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>3 対抗植物利用技術 前作物に対抗植物等を栽培することにより線虫密度を低下させる。</p> <p>4 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。</p> <p>5 フェロモン剤利用技術 雄成虫誘引剤により発生消長を把握し、効果的な防除を行う。</p> <p>6 マルチ栽培技術 稲わら等の利用により雑草を防除する。</p>
その他留意事項	

(3100) しょうが

本作物は、印旛地域の北総台地を中心に栽培が行われており、ほとんどが火山灰土において作付けされている。

これらの地域では、たい肥等有機質資材の投入や緑肥作物の作付・すき込み等により地力を増進していくことが必要である。

施肥については、局所施肥や、肥効調節型肥料の活用や、化学肥料の窒素分を有機質肥料で代替していくことで、慣行の化学肥料の使用量を減少させていくことが必要である。

農薬の使用については、2～4年以上の輪作などの耕種の防除や、防虫ネットの展張、マルチ栽培による雑草防除、対抗植物の利用により、化学合成農薬の節減を図っていく必要がある。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容
有機質資材施用技術	1 たい肥等有機質資材施用技術 腐熟の進んだたい肥等を施用する。 オガクズ・樹皮等を主原料としたたい肥で未熟なものの施用は避ける。 2 緑肥作物利用技術 前年の夏に、ギニアグラスを栽培してすき込む。
化学肥料低減技術	1 局所施肥技術 作物の根が吸収しやすい位置に肥料を集中的に入れることで、施肥量を削減する。 2 肥効調節型肥料施用技術 作型及びその栽培期間に応じて適正な肥効調節型肥料の種類を選択し、施用する。 3 有機質肥料施用技術(どちらか1つでも可) ①油粕、魚粕、骨粉等の有機質肥料を、化学肥料に代替して施用する。 ②牛ふん、豚ふん、鶏ふん等の家畜ふん由来たい肥を化学肥料に代替して施用する。 なお、施用に当たっては「主要農作物等施肥基準」に従い、基肥として用いる化学肥料の概ね3割程度を目安に代替する。
化学合成農薬低減技術	1 生物農薬利用技術 農薬取締法で登録のある薬剤を使用し、病害虫等を防除する。 2 対抗植物利用技術 前作物に対抗植物等を栽培することにより線虫密度を低下させる。 3 天然物質由来農薬利用技術 有機農産物の日本農林規格別表2に掲げる農薬のうち、農薬取締法で登録のある薬剤あるいは特定農薬を使用し、病害虫等を防除する。 4 土壌還元消毒技術 米糠等を土壌混和し十分な水分を加え、土壌中を還元状態にすることで病害虫を防除する。 5 熱利用土壌消毒技術 太陽熱や熱水により土壌病害虫を防除する。 6 被覆栽培技術 ハウス栽培等では、防虫ネットを被覆して、害虫の侵入を防ぐ。 7 マルチ栽培技術 黒色または着色フィルム等の利用により雑草を防除する。
その他留意事項	・土壌還元消毒技術は、開始直後の曇天や地温が低い場合、土壌に十分な水分がない場合には効果が不安定となるため、初めて実施する場合には普及指導員の指導を受けることが望ましい。